

For background on the ability to attract customers in the Bundesliga

1K09B192-2 萬崎将夫

指導教員 主査 石井昌幸 先生 副査 原田宗彦 先生

はじめに

近年、数多くの日本人サッカー選手がJリーグからドイツのブンデスリーガに移籍し、ニュースや雑誌等に取り上げられ、日本人にもドイツ、ブンデスリーガの知名度は上がっている。また日本だけでなく、欧州各国にもブンデスリーガの運営、経営に目が向けられている。

その要因は、平均観客動員数が、世界1位という人気を誇ることで健全運営が行われていることである。近年、欧州では不況の影響を受けているリーグ・クラブが多い中で、ブンデスリーガは、圧倒的な観客数を誇り、健全な運営がなされている。これらが注目され、常々話題にされているが、これらの背景・原因を述べられていることは、意外と少ない。本論考では、どうしてブンデスリーガには人が集まるのか、健全運営とはなにか、どのようなことをしてきたのかを明らかにすることを目的とし、これらをサッカー面だけでなく、歴史や国のスポーツ政策の面からも明かにしていく。

また最後には、日本のスポーツ振興やJリーグは、ドイツをモデルにしていることから、現状でドイツやブンデスリーガとの差を明らかにし、日本が参考にできるところを明らかにする。

第I章 ドイツサッカー史

戦後のドイツでは、国民のアイデンティティと呼べるものが存在しなかった。そんな中でサッカーが頭角を現し、1954年のW杯制覇を機に世界大戦後以来、バラバラだった国民が、サッカーにより一つになり、一体感を与え、現在では国技とされている。そんなサッカーでもイギリスから伝わってきた19世紀終わりでは、あまり受け入れられていなかったが、様々なものから洗練され、ドイツ国民の象徴的なものになっていく。このような経緯があり、プロリーグであるブンデスリーガが生まれた。

第II章 国のスポーツ政策

歴史を整理するとドイツでは、スポーツが生活と密接な関係があることがわかった。生活の一部になるには、国のスポーツ政策があると考え、注目した。ドイツのスポーツ振興は、「ゴールデンプラン」、「第2の道」など日本でもなじみのある政策が行われ、フェラインという地域のスポーツクラブを軸として発展した。この地域スポーツクラブは様々な種目、レベル、

人があり、ドイツ国民の4分の1以上が所属している。ブンデスリーガのクラブもこのような体制で、かつ地域に密着したクラブとなっている。このことがリーグでの観客動員数にも繋がっている。

第III章 リーグ・クラブの政策

国のスポーツ政策で基盤が整ったが、1980年代の人気低迷から、現在のブンデスリーガが誇る観客数の要因は、これだけではないようだ。そこでブンデスリーガ独自の政策に注目するとリーグ全体で健全な運営をしていることが背景にある。健全運営というのは、クラブの資金にあった経営をしていくということ。要は、他国のように大きな負債を抱えてはならないのだ。これを全てのクラブが厳しく審査されている。そのおかげで選手に破格の年俸を支払わなく、人件費が抑えられ、売上高ではプレミアリーグに次ぐ2位だが、収益では、1位という逆転の現象が起きている。その利益を設備・育成に回している。人件費が低い分、選手の引き抜きは相次ぐが、そこは外国人枠の撤廃、ドイツ人枠の設定などの独自のルールを設け、克服している。弱点を魅力に変えてしまう独自の政策が目につく。

第IV章 ドイツと日本の差

ドイツをモデルとしてきたJリーグは、市場規模が違うが順調に20年間を歩んできたことがわかる。観客動員数も日本が決して低くはなく、世界中のリーグが苦勞している。競技面の向上はもちろん、スタジアム設備などまだまだ改善していかなくてはならない。

近年流行っているドイツのような総合型地域スポーツクラブも広がりを見せているが、認知度は低く、施設面以外でも環境・制度が整っていない。ドイツのものを真似ているだけでは根付かず、日本の社会制度に合わせた日本オリジナリティの方針も必要である。

おわりに

日本のJリーグがブンデスリーガの健全な運営をモデルにしたことは、遅れて発足したJリーグには適切だったと言える。ドイツをモデルとしてある程度まで進んできたが、現状以上になるにはオリジナリティが必要である。今後のJリーグ、地域のスポーツクラブなどの日本のスポーツは、日本に適した独自の方針をしなくてはならない。スポーツの価値を示し、スポーツ文化を根付かせなければならない。